
りんの花

さくら栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんの花

【著者名】

N4355A

【作者名】

さくら栄

【あらすじ】

毎年誕生日の朝、小屋の外に置かれている花・竜胆。七年半ぶりの再会に、揺れるりんの心。原作後の設定の話です。

壱／届いた文と空白の席。

いつの日からだろう?

私はある一匹・・・の人間の娘を連れて行動するようになつた。

理由は分からぬ。ただ・・・生前私に向けた笑顔が脳裏をかすめた。そして気が付いた時には、父の形見の剣、“天生牙”を抜いていた・・・

よく喋る人間だつた。生前は口をきけなかつたが、一度死んで生き返つた為か何の障害もなく喋る事が出来たようだつた。

それにしても不思議でならなかつたのは、あの小さな体で、口でよくあれほど動き回り、喋つていたのだろうか・・・?

それだけ食料と休憩・・・睡眠が必要だつたようだ。

その為、いつしかその人間に合わせて行動するようになつた。よくヨチヨチと私の後を付いてきた。

私から見れば邪見も“ヨチヨチ”と歩いていたわけだが、あの短くて細い足、たどたどしい足元・・・その歩みは邪見よりもゆっくりとしていた。

いつしか阿吽を指定席とするようになつた。今まで人間と触れ合つた事のない阿吽だつたが、元々のおとなしい性格の為か、その他に何かあつたのか、驚くほどその人間に懐いた様だつた。

「殺生丸様・・・」

ふと耳に入つたその声を無視する様に先へ進もうとする主。声の方を見なくとも誰かは分かる。もう何年、いや、何十年以上も聞いている忠実な僕・邪見の物だつた。

別にいつもの事。そう思つた邪見は言葉を続けた。

「早く戻つて來い。つとのことですが・・・」

「いつもの事だ」

構わず歩き出した殺生丸を、ヨチヨチと付いて行きながら言つ邪

見にボソリと言つた。

「いい年をして何時まで家出」との様な事をするのか、つとも・・・

「

昔からだ。この年老いた僕は主に忠実だが一言多い。

鈍い音がしたかと思うと、邪見は地面にへばりつく様に倒れていた。そしてその背中にはくつきりと足跡がのこつていた。どうやら突然止まつた主に気が付かず、抜かした所を踏み潰されたようだ。

倒れた邪見の手に握られている文をむしり取ると、目を通した。どうやら少しは成長があつたのか、主の怒りを買ひそうな所は伝えなかつたようだ。先ほどの言葉はまだまだ可愛い物だった。

なるほど・・・あの方らしい。

軽く溜め息をつくと殺生丸はそれを、やつと立ち上がつた邪見に突き出すように渡した。

やれやれ・・・この方から文が来る度に同じ田にあつてる
気が・・・

文をしまいながら邪見は大きく溜め息をつき、不機嫌そうな主を見上げた。この始まりは十分程前、いつもあの方の使いがこの文を届けに来た事からだつた。

「若様・・・」

いつもの、長い黒髪をきつちりと束ねた男がいつもの様に殺生丸に一礼した。そしてこれまたいつもの様に邪見の方に軽く会釈してから懐から文を出し、殺生丸へと渡した。

主はこの男と面識があるようだつたが、邪見はこの男が文を届けに来る前は面識がない。しかし見るからに真面目そうな、そして忠実そうな男だ。

そしてあの主と同じ金色の目から見て、恐らく同じ妖犬なのだろう。「御館様・・・貴方様の叔母上は口ではああきつく言つておられますが、本当は貴方様の事が心配でしうがないのです。そして早く屋敷に戻つてきて、そして貴方様の父上の後を継いでももらいたいのです」

「それならもう何度も聞いた」

いつもの様にぶっきら棒に言つ殺生丸の言葉に、使いの者・・・名前は分からぬが、その男は少し悲しそうな顔を向けた。殺生丸と前々から面識があるのなら、きっと言つても聞かない性格も知つてゐるのだろう。それ以上何も言わずに、ただ一礼して去つていった。

まだ機嫌が悪い主の後を邪見は、阿吽を引きながら足早に追つた。いつもそうだ。あの方からの文が来ると、不機嫌になられ足が速くなる・・・

阿吽に乗ればいいものの、邪見はそうはしなかつた。けして殺生丸の目が気になるわけではなく、ただそこが彼の場所ではないからだ。

今はそこに居ないが、そこはある人間の少女の居場所であった。そこに座ると言う事は、その少女の場所をなくす様な気がしてならなかつた。

それは彼にとつても主にとつても悲しい事だ・・・

「ふう・・・」

そんな風に考へる自分に気が付き、邪見は寂しそうに溜め息をついた。最初から、いつかこういつ日が訪れると分かつてたはずだ・・・。ただそれが少し早く来ただけの事。

あれから・・・

りんが居なくなつてからもつ七年半の月日が経つといふのこ・

・

春へ届いた文と空白の席。 (後書き)

初ケータイに載せます^
まだここ使い方が分からなくて戦慄しましたよ;
さてさて、この「りんの花」。結構行き当たりばつたりのような感じでしたね; というか半分はそう;
実を言うと、この後の設定の話しが書きたいが為に書いたなんですよ
(笑) そしてその話の中にはこの「半年」の意味があるんですね^

武^ム闇^{ムカシ}を知^ルぬ花^ハ・竜胆^{リュウタン}。しかし闇^{ムカシ}を知^つて^ルや・・・。

少し肌寒くなつた秋の日の午後、夕方近く、殺生丸の叔母からの文が届いてから、数日が経つたある日のことだつた。

一行はある山へと足を運んだ。

一年にたつたの一度しか行かぬ山、毎年欠かさず一度行く山へ・・・。森を抜けてお田当ての場所に着くと、邪見は軽く辺りを見回した。毎年同じことをやつている。

広い草むらだつた。

夏の青々しさはないが、まだ微かに緑帯びている草に混じつて色々な花が咲いている。

薄^{ススキ}に萩^{はぎ}、葛^{くず}、撫子^{なでしこ}、女郎花^{おみなえし}、藤袴^{ふじばかま}や桔梗^{ききょう}など、秋の七草と呼ばれて

いるものを初め、色々な秋の花が咲き始めていた。

殺生丸は草むらの前で足を止め、邪見だけが草むらへと進んでいつた。

阿吽は主の居る所、草むらの入り口に置いておいた。繋げておく必要などない。

二つの頭を持つ妖怪・阿吽は、邪見が行くと草むらの片隅に座り込んだ。

夕暮れ時だが、よく陽が当る草むらで、晴れている為か余計日向ぼっこには最適だつた。

その上、いくつもの甘い花の香りが鼻をくすぐる。阿吽の顔は一つとも気持ち良さそうな顔をさせた。

しかし、ちょっと心配そつて草むらを歩き回る邪見に田をやつた。

そしてそれは、殺生丸も同じ様だつた。

草むらを眺めているように見えるが、たまに邪見を田で追っていた。
一体毎年何の為に口々くやつてくるのか？
その答えはすぐに分かつた。

「殺生丸様、ありましたぞ！」

そう大声で主のほうに言いやると、自分は田の前の自分の背丈と
とあまり変わらない花を見つめた。

無言のまま邪見の声がした方に田をやつた殺生丸だが、すぐに視線
を外し、再び周りを眺め始めた。

いつもの様に返事をしない主に、この年老いた僕はすぐにまた草む
らを歩き始めた。

邪見と同じくらこの背丈・・・30センチから40センチ程だろ
うか？

真っ直ぐに伸びたが細い茎に、淡いピンク色の花を鈴なりさせてい
た。その周囲には、青や紫の物がほんじだった。

花の名は**龍胆**。

日光を受けるとその花弁は開き、暗くなる夜には閉じる。雨や曇
りの日は閉じたまま・・・
まさに陽しか知らぬ、闇を知らぬ花だ。しかし中には一生陽を知
らない種も居るようだ。

だが、陽しか見えなくとも同じ事。闇を知らねば、陽の意味も分か
らない。

一見輝かしいように見えるが、なんとも切ない、悲しい花だ・・・

野山に力強く咲く姿はなんとも健氣で、その細い茎を支えてあげた
くなるくらいだ。

そんな姿は・・・

そう・・・

まるである少女のようだ……

花を開かぬ、闇しか知らぬ種が花弁を開いた……そんな感じだ
うづか……？

一体どれくらい経つたのだろうか？

草むらを懸命に歩き続ける邪見をよそに、傾き始めた太陽はどう沈んで行こうとしていた。

「殺生丸様！ これは見事な一輪ですぞ！」

再び邪見のかすれた声が主の耳に届いた。

「さつさと済ませろ」

何度もかの叫び声によつやく反応した主の声に、邪見はその茎の根元を掴み、慎重に折つた。

パキンと綺麗な音がした。

大事そうにそのいピンクの薔がなるか細い茎を抱えると、主の下に走り寄つた。

「今年のは今まで一番見事に見えますぞ。殺生丸様」

自分の収穫に少々興奮気味に、邪見はその収穫を主へと差し出した。

「……今年で七度目ですね」

ふと、何処か遠くを見つめるような目で邪見が口を開いた。

その間にも殺生丸は口を開かなかつたが、自分もたつた今まで太陽が在つた方向を見つめた。

「りんのヤツ、この花が好きでしたな」

独り言の様にそう呟くと「あ、あの……殺生丸様……」
なにか言いにくそうに再び口を開いた。

「今年は～・・・そのお～・・・ワシが・・・りんの下に届けても・・・いいでしょか・・・？」

しぶしぶと上田使いで主を見上げたが、殺生丸は無言のままだつた。

「その・・・何と言つか・・・殺生丸様が行かずともワシがその役を・・・その・・・なんて言つか・・・」

最後の方は口の中ではそそと言つ形になつていた。

そんな邪見を殺生丸は無言で見下ろしていたが、「いやつ氣にしないで下され」慌てて邪見がそう言つと

「お前が行け」

やつと口を開き、一言言い放つた。

「はつ！かしこまりました！」

口には出さなかつたが、ただ単に主の為にその役に名乗り上げたわけではなかつた。

口に出して言つのが恥ずかしかつたが、ただ・・・

ただ・・・姿は見えなくとも、少しでも近くへと行きたいと。あの娘の下へ・・・

だがそれは殺生丸とて同じ事だろう。そう思つた邪見は慌てて言い直したのだ。

空には見事な三日月が浮かんでいた・・・

武へ闇を知らぬ花・竜胆。しかし闇を知つてJAN・・・・（後書き）

三日月つて好きです。というか月つて好きです。

少しずつ満ちてゆく満月もいいですが、やつぱりどきりかといつて
色々な形のある三日月のほうが好きですね。

では次回、懐かしいあの原作のキャラ達が登場します＼

参考用出来ない思い。

少年・・・いや、もう青年と呼ぶに相応しいだろ？

歳ははたち前、18、19といった所だろうか？彼は先ほどから何処かを見つめていた。

その視線の先には赤ん坊とその母親らしき女性、そしてその赤ん坊をあやす一人の少女の姿があった。

ずっとそちらの方を見ていたのだろう。母親らしき女性は青年の視線気が付いたようだ。その様子に少女も赤ん坊をあやす手を止め、青年の方に目を向けた。

「あ、琥珀！ちょっと来て来て！」

まだ少し幼さが残る、可愛らしい声で青年に声をかけた。

その声に青年・・・琥珀は微かだが顔を赤くしが、すぐに「どうした？」と何事もなかつた様に、少女に問い合わせ歩み寄つた。

「今ね、瑠璃が『りん』つていつたんだよ！」

「ホントか？ただ『ん～ん』つて言つたのが『り～ん』つて聞こえたんじやないのか？」

少女興奮氣味に言つ少女は青年のその言葉に、ブクーっと顔を膨らませた。

「そんな事ないもん！ね？珊瑚さん？」

少女・・・りんに振られたのは母親らしき女性・・・珊瑚はちょっぴり困つた顔をさせたが、直ぐに「ちゃん」と『りん』つて言つてたんじやない？」

そう言つてから面白そうに弟とこの少女を見た。

「ね？ほら、瑠璃、りんはだ～れだ？」

そう言つて赤ん坊の方に言つたが、調度つとつとさせている田を閉じた所だつた。

「あ～あ・・・もうお寝んねの時間だったのかな？」

瑠璃の白くて柔らかい頬っぺたを優しく突きながら微笑むりんの姿を見て、琥珀は「くすっ」と笑った。

「ん? 何? 今りんの事見て笑ったの? 」

「別に。そういう訳じゃないけど」

思わず笑ってしまった、いや、正確には微笑んでしまった自分に気が付いて、琥珀は慌てて口を開いた。

「けど何?」

「別に・・・なんでもないって」

しつこく聞いてくるりんに焦りながら誤魔化した。

「ふ～ん・・・」

まだ諦めてないようなりんは、また顔を膨らませて琥珀の方を見た。

「ほら、そんな大声で話してたら起きちゃうでしょ?」

りんがまた何か言いそうな勢いだったので、珊瑚が止めに入った。

「だつて、琥珀が〜」

まだ顔を膨らませたりんが、すがるように珊瑚に言つた。きっと自分の事を面白がつて笑つたと思つていいのだ。

ホント、この子は鈍いね・・・

そしてクスッと笑つた。

「あ～珊瑚さんまで〜!..」

そう声を上げてから、起き出しそうな瑠璃姿に思わず両手で口をふさいだ。

「そんな理由で笑つたんじゃないよ」

その言葉に、りんはわけの分からぬ顔をしたが、珊瑚はただニッ「つと微笑んで見せた。そして、少し離れた所で夕日を見上げる弟

の姿を、りんに悟りぬ様に盗み見した。

まやか言えるはずがないだろ。

なんて愛らしくないんだろ」と思つたなんて・・・

参考文献

ちょっと豆知識…珊瑚の一一番下の子供（上にも何人も居ますよ）の名前の“瑠璃”はですね、七宝という七種の宝物の一つなんです。ちなみに金、銀それから“珊瑚”や“瑪瑙”なんかもそうです。

さて、八年後（正確には七年半）と言う事で琥珀も十九歳！（兄上の人間換算年齢と同じやん！）りんちゃんは、あの頃六、七歳と考え、（五、六歳と書いている方もいらっしゃいますが、私的には小一なんです）犬夜叉に出逢った時のかごめと同じ歳、十四、五歳と言う事です。でも精神年齢低いと思います；それにしてもうち琥珀で遊ぶの好きです♪（マテヤ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4355a/>

りんの花

2010年10月9日12時14分発行